

01

ハウス・オブ・ヤマナカ
東洋の至宝を欧米に売った美術商

朽木ゆり子 著

新潮社
2100円/356ページ

profile

くちき・ゆりこ

東京生まれ。国際基督教大学教養学部社会科学科卒業。同大学院行政学修士課程修了。米コロンビア大学大学院政治学科博士課程に学ぶ。1987年から92年まで『日本版エスクァイア』誌副編集長。94年よりニューヨーク在住。

ハウス・オブ・ヤマナカ
東洋の至宝を欧米に売った美術商

朽木ゆり子

跡形もなく消えた
美術商の謎に迫る評者
フレイムワークマネジメント代表取締役
津田倫男

20年ほど前のことになるが、ロンドンにあるボンナムズという美術商を訪れたことがある。年代を経たビルの重厚なドアを開けると、モデルと見まがう美男美女による丁寧な出迎え。階段を上ってオーナー社長の部屋に入れば、高価な陶磁器が無造作に並び、絵画の名作が所狭しと壁を飾っている。美術商の奥の院を垣間見て、居心地の悪さを覚えたものだった。

本書はそうした美術商のうち、日本ではほとんど無名だが、戦前の海外では圧倒的な知名度を誇った山中商会と、そのオーナーの山中家、番頭たちの物語である。著者はヨハネス・フェルメールの連作を書き、美術の世界に精通している書き手だ。

山中家の分家の娘婿となった山中定次郎が、売れるという見込みで仕入れた国宝級の屏風の商談がいったん破談となり、投身自殺を考えるとところから本書は始まる。幸い商談が復活し、定次郎はその後、ニューヨーク、ロンドン、北京など世界中を股にかけて活躍する。山中商会の妻は、「メトロポリタン

ハウス・オブ・ヤマナカ

序章 琳派屏風の謎

第一部 古美術商、大阪から世界へ

「世界の山中」はなぜ消えたか/アメリカの美術ブームと日本美術品/ニューヨーク進出/ニューヨークからボストンへ

第二部 「世界の山中」の繁栄

ロンドン支店開設へ/フリーアと美術商たち/日本美術から中国美術へ/ロックフェラー家と五番街進出/華やかな20年代、そして世界恐慌へ/戦争直前の文化外交と定次郎の死

第三部 山中商会の「解体」

関税法違反捜査とロンドン支店の閉鎖/日米開戦直前の決定/開戦、財務省ライセンス下の営業/敵国資産管理人局による清算作業/閉店と最後の競売/第二次世界大戦後の山中商会

終章 如来座像頭部

美術館、ボストン美術館、大英博物館など、大規模な東アジア美術コレクションのデータベースを覗くことが可能なら、山中商会が供給源である美術品を数百点、いやそれ以上の規模で見つけることができるだろう」という記述からも明らかだ。

それだけの隆盛を誇った山中商会が戦後、「跡形もなく消えてしまった」理由を著者は第2次大戦に求めている。米国にとって敵性国の資産である山中商会の美術品が接収され、戦中、戦後に売りさばかれてしまったのだ。山中商会の顧客には日本美術を顕彰したアーネスト・フ

エノロサや岡倉天心がいる。岡倉に至っては特製の弁当を山中商会のニューヨーク店で食べることを常としていたらしい。

山中商会の興隆のきっかけは1876年開催のフィラデルフ

イア万博のようだ。最も人気を集めた日本館には「色彩豊かで装飾たっぷりの磁器や七宝の大花瓶が、ピラミッドのようにびっしり積み上げられ」ていたらしい。その万博が「ほとんどのアメリカ人にとって日本の美術品や工芸品を見る初めての機会」を提供し、ロックフェラー家をはじめとする美術品愛好家の富豪たちと山中商会との取引につながっていく。

松方コレクションとかかわり、顧客であり後に山中商会の店舗の大家となったロックフェラー家との手紙のやり取りなど面白いエピソードがある。中でも清朝保有の名宝が海外へ流出した件と山中商会とのかかわりは世界史をリアルタイムで見るとような醍醐味にあふれている。「異界」の美術品市場について学ぶ入門書にもなる好著。